

恩寵のバーガンディ

平瀬たかのり

主な登場人物

- 杉原陽鞠（ひまり）（17）高校二年生
の祖母・料理教室講師・元銀行員
- 春野寿道（としみち）（17）高校二年生・陽鞠のクラスメイト
- 高梨凜香（17）高校二年生・陽鞠の親友
- 村川彩美（17）右同
- 増山香里（22・23）佳也子の銀行員勤務時代の同僚・短大の同級生
- 杉崎美幸（22・23）右同
- 岡原仁一（24）佳也子の恋人・陽鞠の祖父
- 銀行東里支店人質事件犯人
- 銀行東里支店人質事件犯人
- 緑山勝次（29・30）バー「テンドー」・七星
- 丸川梨乃（32）大阪市立図書館司書
- 奥村（39）美容院「サマルカンド」店長
- 田所（59）日本史講師
- 岡島瑠子（55）生徒指導担当教諭
- 前田（48）陽鞠の同級生・男子バスケット
- 神保（15）酒問屋社長

○七星銀行東里支店・店内
ヘテロツプII(以下T) 1979年1月26日~
営業中の店内。二十名ほどの客。

○支店前の道路
停まるライトバン。乗車席から降りるチロリアンハット、サングラス、白マスクの男、緑山勝次(30)。ゴルフバッグを左肩掛け。右手に大きなバッゲを持つて支店内へ駆け足で入つていく。

○七星銀行東里支店・店内

緑山、手早くゴルフバッグから獵銃を取り出すと、天井に向けて一発発砲。行員、客の悲鳴。右手のバッグをカウンター内に投げ入れる緑山。パニックになる店内。緑山「五千万や! 早うバッグに入れえ!」

○画面

いちどきに暗くなつて。

○美容院・サマルカンド・外景
瀟洒な店構えの美容院。

○前同

店長・沖村(39)に、紫がかった赤い髪をカットしてもらつている杉原陽鞠(17)。

精算時。女性店員の隣に立ち、ヘ地毛
証明書を手に持つて読み上げる沖村。
「当該生徒の毛髪において、髪染め、
脱色のなされていないことを、ここに証明
するものである」——はいはい、証明させ
ていただきますわ」

沖陽鞠村「陽鞠ちゃん」
「ぼくは、陽鞠ちゃんのバーガンディ、

沖村「陽鞠ちゃん」
阳鞠「なに」「ぼくは、陽鞠ちゃんのバーガンディ、
めつちや綺麗や思つてるからな。パワー！」
中山きんに君のマネをしてポーズを
決める沖村。

阳鞠「なんできんに君なんよ」
沖村「最近ハマつてるねん。毎晚動画見なが
ら酒飲んでる。やー！」
爆笑する陽鞠。

○ 杉原家・洗面室(朝)
鏡の前に立ち、櫛で髪を梳いている陽
鞠。

○前同・仏間(朝)

・ 仏間（朝）
仏飯の乗った膳を持つて入つてくる
陽鞠。仏壇には信士、信女が連名の位
牌と、居士の位牌。
仏飯三つを供える陽鞠。鈴を鳴らし手
を合わせる。

○前同・居間（朝）

4

陽 凜 彩 陽 彩 凜 ○ 登 校 路 (朝)
鞠 香 美 鞠 美 香
「も 凜 わん 陽 鞠 お ひ 一 高 梨
う 香 た ふ 陽 鞠 ま ま 凜 香 (17) と 村 川
、 も し ふ つ い ま お つ は よ ー
や 陽 も と い ま お つ は よ ー
め 鞠 も と い ま お つ は よ ー
て の 髪 を 跳 ね 上 げ る。
え や あ い い て

歩 い て い る 陽 鞠。後ろから駆けてくる
高 梨 凜 香 (17) と 村 川 彩 美 (17)。

陽 佳 鞠 陽 佳 鞠 陽 佳 鞠 陽 佳 鞠
「忘 れ ん と 持 つ て 行 き や。地 毛 の や つ」
佳 也 子 「黒 に 染 め て も ろ た ら そ ん な も ん 出 さ
ん で 济 む ん や ろ」
「ま た そ れ 言 う。岡 島 と い っ し ょ の こ と
が な ん か 言 わ ん と い て え や。わ た し は この 髮
に 気 に い つ て ん の。地 毛 が あ か ん く て、黒
お か し い ん や。ち が う?」
佳 也 子 「そ れ は、ま あ、そ や け ど な あ」
「『そ や け ど』な ん に よ」
無 言 で 味 増 汁 を す す る 佳 也 子。
陽 鞠 「ほ ん ま に 一 回 見 たい ん や け ど な、わ た
し と い っ し ょ の 髮 の ば あ ば」
食 事 を 分 か つ て し は 黒 い 髮 が 好 き な ん や
を 続 け る け ど 二 人。

嬉しそうな陽鞠。

○ 朔ヶ原高校・二階廊下（朝）
手を振りあう陽鞠と凜香、彩美。陽鞠、
七組へ。凜香と彩美、五組へ入つて行
く。

○ 前同・二年七組（朝）
自席に座る陽鞠。隣の席で文庫本を読
んでいる春野寿道（17）。

陽鞠「春野君、おはよう」
寿道、陽鞠を見て。

寿道「おはよう。あ、杉原さん髪切ったんや」
陽鞠「お、なかなかやね」

陽鞠「そういう事に気がついて、ちやんと言
えるのはなかなかのもんやで」

陽鞠「今日はなに読んでるのん？」

寿道、文庫本の表紙を陽鞠に見せる。

ん

や「うん

」

陽鞠「この前もそんなん読んでたやんね。な
まつたつけ、えっと――」

うん

」

」

」

」

」

」

」

」

」

」

」

」

」

」

」

」

」

」

」

」

」

」

」

」

」

」

」

」

」

」

」

」

」

」

」

」

」

」

」

」

」

」

」

」

」

」

」

」

」

」

」

」

」

」

」

」

」

」

」

」

」

」

」

」

」

」

」

」

」

」

」

」

」

」

」

」

」

」

」

」

」

」

」

」

」

」

」

」

」

」

」

」

」

」

」

」

」

」

」

」

」

」

」

」

」

」

」

」

」

」

」

」

」

」

」

」

」

」

」

」

」

」

」

」

」

」

」

」

」

」

」

」

」

」

」

」

」

」

」

」

」

」

」

」

」

」

」

」

」

」

」

」

」

」

」

」

」

」

」

」

」

」

」

」

」

」

」

」

」

」

」

」

」

」

」

」

」

」

」

」

」

」

」

」

」

」

」

」

」

」

」

」

」

」

」

」

」

」

」

」

」

」

」

」

」

」

」

」

」

」

」

」

」

」

」

」

」

」

」

」

」

」

」

」

」

」

」

」

」

」

」

」

」

」

」

」

」

」

」

」

」

」

」

」

」

」

」

」

」

」

」

」

」

」

」

」

」

」

」

」

」

」

」

」

」

」

」

」

」

」

」

」

」

」

」

」

」

」

」

」

」

」

」

」

」

」

」

」

」

」

」

」

」

」

」

」

」

」

」

」

」

」

」

」

」

」

」

」

」

」

」

」

」

」

」

」

」

」

」

」

」

」

」

」

」

」

」

」

見る寿道。

寿道「この本に収録されてる『江夏の21球』っていう作品がとにかくすごいねん。そういうやな、これはスポーツノンフィクションの古典って言つてええんやろうなあ」
陽鞠「古典——『春はあけぼの』的な？」

陽鞠「いーや、絶対バカにした」
寿道「うーん、でも確かにこれはほ

寿道「うーん、でも確かにこれはほんまに『春はあけぼの』かもしけんなん。ぼくこれ、昨日の夜初めて読んで、すぐ二回目読んで、なんか寝られへんくて、夜中にもう一回読んで、今四回目読んでるとこ」

寿道「1979年の広島対近鉄の日本シリーズ、優勝がかかった第七戦。江夏豊つてピッチャーが九回裏に投げた21球について書いて書かれてるんや。プロアスリートの心技体、その粹がつまつた優勝が決まるラストイニングに江夏が投げた21球。それを山際淳司さんが一球一球いろんな人に取材して、調べて丹念に書いてる。すごい、この作品はほんまにすごい」

熱く語る寿道をじっと見ている陽鞠。

寿道「あ、なに言うてるか分からへんやんね、

阳鞠「ううん、なんぼかは分かるで。わたし
中学校のときソフト部やつたから。まあでも
も春野君がその本にすごく感動したこと
ははつきり分かつたわ」

寿道「——うん、そななんや。感動したんや
ぼくは」
陽鞠「昨日から四回も読んでるくらいやもん
な」

寿道「ソフト部やつてんね、杉原さん」
陽鞠「うん。公式戦で一回も勝ったことない
弱小ソフト部のサードの補欠」

寿道「高校入つても続けようつて思わへんか
つたん?」
陽鞠「ヒーヒー汗かいて練習で走るのとか、
中学の時だけで十分。考えただけでゲー出
そうや」

寿道「そつか」
陽鞠「陽鞠を見る寿道。気づく陽鞠。」

寿道「陽鞠」「今い、ごめん」
阳鞠「『今』つて?」
「いや、だから——ごめん」
「ぜんぜんかまへん、そんなん」
読書に戻る寿道をじつと見る陽鞠。

日本史の授業中。講師の田所（65）
×
田所「えー、もうすぐ楽しい楽しい夏休みや。
そこでや、みんなには自由研究としてこう
いうことをやつてもらう」
×

田所「えー、と書く田所。
黒板に大きく「現代史研究 1945」
生徒から「えー、問題集とかあるやん」
2000

「めんどくさー」の声が上がる。
田所「なにがめんどくさいじや。あのな、問題集やるのも年号暗記するのもそら大切や。けどそんなもんはあくまでへ勉強へや。まあへお勉強へ教えるのがわしらの仕事やけどやな」

男子生徒Aが手を挙げる。

A 「どんなことしたらええんですか」
田所「先の大戦終わった1945年か

世紀が終わつた2000年までの出来事、人物、事件、なんでもええから調べてみろって言うとる。それこそがほんまのへ勉強や。きみらのおじいさんやおばあさん、お父さんやお母さんが生まれ、青春を過ごした時代かて日本史の一部なんや。テー^トマは自由。現代史を自分の力で調べてノートにまとめろ。それが日本史の自由研究課題や。テー^トマが決まつたら言いにこい」

所「これやから今のガキは——かまへん。今の時代それが当たり前やつていうことくらいわしも分かつて。けどな、一回は図書館に行つてみろ。きみらは本の、紙の手触りを知らなさすぎる。自分のテーマについての関連書籍を見つけて読んでみろ。ええな。よつしや、マクラはここまで。一学期最後のへお勉強へはじめるぞお」

田所。板書の文字を黒板消して消していく

×

チャイムが鳴り授業が終わる。教室を出る田所。椅子から立ち上がりつた寿道、田所を追うようにして教室を出る。その様子を見ている陽鞠。

○前同・廊下

寿道「春野、どないした」
田所「えんですか」
寿道「なにか調べたい事があるんか」

田所「はい『江夏の21球』です」
寿道「ほう。山際淳司さんやな」

田所「読まれてるんですか、先生」
寿道「もちろんや。あの試合テレビで見てた

田所「えっ、リアルタイムで見てはつたんで
寿道「えっ、リアルタイムで見てはつたんで
田所「そうや。あれは大学四回の年や。貧乏
学生やつたから下宿にテレビなんかのう
ってな。金持ちの坊さんの子がツレに一人お
つたから、そいつの下宿に通いつめて全試
合観戦した。わしながら近鉄ファンやつたんや
寿道「そうやつたんですか」

○前同・廊下側の窓際に立ち、語り合う寿道と
田所を見てい陽鞠。

○前同・廊下

田所「体育の授業で提出した『清原和博への
想文も読ませてもらた。宗次先

○前同・二年七組
戻つてくる寿道。自席に座る。
陽鞠「田所先生となに話してたん?」
寿道「見てたん?」
陽鞠「うん」
寿道「自由研究『江夏の21球』調べてもえ
えかって訊いてたんや。田所先生、かまへ
んつて」
陽鞠「そつか、よかつたやん」
寿道「うん。他の教科の課題早い事終わらせ
て、納得いくもん書きたいわ」
上気している寿道の顔を見つめる陽

生が『しつかり書いてます。感動しました。』
読んだつて下さい』言うてな」

寿道「そうなんですか」

田所「原稿用紙で二十枚。たいした文章力や。
好きなんか、スポーツノンフィクション」
寿道「はあ、ずっと小説ばっかり読んできた
んですけど、鈴木忠平さんのあれ読んでもか
ら興味持つたっていいか」

田所「そんでからの『江夏の21球』か」

寿道「はい」

田所「元近鉄ファンとして楽しみにしてる、
春野の『江夏の21球』——春野寿道君、
きみは十分体育をやつとる。そしてきみには文筆の才がある。それを信じてたくさん
道道「はい。ありがとうございます」
いきみみたいな生徒、昔はもうちょっと
いってたんやけどな」
去つていく田所。

鞠。

○前同・運動場
体育の授業中の男子生徒たち。サッカーの試合が行われている。

○前同・二年七組
自席に座り、原稿用紙に向かつて執筆をしている寿道。机には『スローカーブをもう一球』。原稿用紙に『江夏の21球』を調べるにあたつて、と記す寿道。立ち上がる寿道。窓際に寄り、同級生たちの試合をしばらく見る。自席に戻り、執筆を始める寿道。

○さくらキッチンスクール・外景
奥また通りにあるこじんまりとした料理教室。

○前同・教室内
十人ほどの生徒を前にして教壇に立つていい佳也子。
佳也子「今日は鶏肉を使つたお料理にチャレンジしてみましょう。お肉の中でも安価で栄養価も高く健康面でも優れている鶏肉の料理をたくさん覚えて、彼氏、旦那さんの笑いのおきる教室。ガツチリ掴んじゃいましょうね」

○朔ヶ原高校・職員室内
自席に座つていい生徒指導担当教諭

○帰り道

陽 鞠「あー、ホンマ岡島腹立つ！なにが『艶やかな黒髪、それは日本人女性の淑やかな美しさを象徴する代表的なものよ。覚えておきなさい』と爆笑する凛香と彩美。」

凛 香「完コピやし」

陽 鞠「髪切って証明書出すたび言われるね覚えてしもうたわ！」

凛 香「なんも腹立つわ！」

陽 鞠「まあそう怒らんと。で、陽鞠どうする

「なにがつて前田君のことには決まってる

凛 香「なにがよ」

岡島 瑞子（49）。その前に立つている陽鞠から渡された地毛証明書を手にしている瑞子。

瑞子「はい」

瑞子「めんどくさいやろ、髪切るたびにこれ持つて来るの。黒に染め。そしたらいちいちこんななん出さんですむんやから」

瑞子「絶対にいやです」

瑞子「強情な子やわ。艶やかな黒髪、それは日本人女性の淑やかな美しさを象徴する代表的なものよ。覚えておきなさい」

職員室を出ていく陽鞠。

● やろ「
ヘイン

ンサート・朔ヶ原高校・体育館▼
男子バスクケットボール部の部活動中。
紅白戦、小気味よくドリブルを続け、ス
フェイントで相対の部員をいなし、ス
リー・ポイントシュートを決める前田。

凛香「なんの不満があるんよ」
彩美「ほんまや。なに迷つてるのん」
陽鞠「うん——なあ、凛香は祐志くんのどこ
がよくって付き合おうつて思つたん?」
凛香「わたし? うーん、そやなあ。やっぱ
りわたしの気持ち大事にしてくれるとこ
ろがいちばんやつたかなあ。大学生やから
やっぱ大人やし。いつしょにいてて安心感
あるつていうのも大きかつたなあ」
彩美「のろけ大炸裂」
「訊かれたから正直に答えただけやし」
「そつか」
肩を並べて帰っていく三人。

○ 杉原家・佳也子の部屋（夜）
ベッドに横たわり、料理の本を読んで
いる佳也子。ドアがノックされる。
佳也子「入り」
入つてくる陽鞠。
陽鞠「先生やのに、本読むねんな」
起き上がる佳也子。
佳也子「一生勉強や」
ベッドに並んで腰かける二人。
佳也子「前田君のことか」
佳也子「つきあうの、不安か」

陽鞠「うん、まあ——好きや言うてくれたのは、悪い気せえへんけど」

佳也子「よう考え」

佳也子を見る陽鞠

陽鞠「いや、ちょっと意外やつたから」
佳也子「背中押してほしかったんかー」

陽鞠「それは、ちよつとあつたかも。
まあばー

佳也子「なんや」

佳也子「え」
陽爾「や」
一
一

陽鞦子也佳也
い や そ や か り
り 、 そ う や 」

陽鞠 うん やはりそうか
佳也子の手を握る陽鞠。

○ 朔ヶ原高校・校門の前

前田「杉原さん」下校している陽鞠、凜香、彩美。

後ろから声をかける前田。振り向く三
人。

凛香「そしたら、うちらはこれで
彩美「陽鞠、さいなら」

陽鞠「笑いながら去つていく二人。」

前田「いつしょに帰ろうや」

前田「顧問の南先生、研修とかで休みやねん。
そやから今日はオフや。いっしょに帰るの

もあかんか？」

○ 杉原家・前
向かい合つて いる 陽鞠と 前田。
前田 「いつしょに 帰れて 嬉しかつた」
陽鞠 「――うん」

前田 「返事、いつでもええから」

前田 「うん」「けど、夏休みの間にはほしいな。そんなで、杉原さんといっしょに海に行きたい」

前田 「うん。そしたら」

手を振る前田。陽鞠も小さく手を振り返す。去つていく前田の背中を見ていよいする陽鞠。玄関扉を開けて家へ。

○前同・台所

佳也子が料理をしている。そこへ入ってくる陽鞠。

佳也子「まだいま。早いやん——あ、今日は午前だけの日か」

冷蔵庫を開け、麦茶のボトルを取り出しこツブに入れて一気飲みする陽鞠。

佳也子「なんや、お疲れ気味やな」「せやねん。ちょっと部屋で横になるわ」

佳也子「今日は鶏スペシャルやで。教えるついでに準備してきた」「そつか、ありがとう」

也台所を出ていく陽鞠。料理を続ける佳

○前同

・陽鞠の部屋スマホを軽くベッドの上に放り投げる陽鞠。ベッドの上に身を投げ出し、うつぶせになる。自由研究のこととか、めんどいんやつ

たら、無理に話さへんかてええやん……」

枕を抱きしめ、ベッドの上で土口転がる陽鞠。やがてじっとする。

陽鞠

○前同・居間（夜）

・居間（夜）
座卓の前、パジャマ姿で座つて いる陽
鞠。卓には、から揚げ、胸肉のハム、
砂肝とピーマン炒め、ササミと野菜の
サラダ、肝の甘煮、セセリの串焼きな

「満足そうに食べている陽鞠。

ンチがほしいんよなあ」「明淑の瓶を手取り振りかねる易納

口に運ぶ。頷きながら咀嚼する。

イレン音。テレビを見る陽鞠。

ル！ 実録20世紀事件史』。

て一礼する。

番《ザ・リアル！ 実録20世紀事件史》

は 1979年1月に起こつた七星銀行東里支店人質事件です。この事件は、獵銃を持つた男が、銀行を襲撃、駆け付けた警官二名と行員二人を射殺した後、銀行員と店内にいた客、約四十名を人質に籠城。立てこもりは四十二時間にも及び、最終的に事

件は突入した警察の特殊部隊が犯人を狙撃。犯人死亡という形で終結します。この衝撃的な事件が現代に伝えるものはなにか。詳細な再現ドラマによつてお届けいたします』

画面をじつと見つめる陽子。

から上がり、居間に入つてく

也子。

佳也子一あいえお湯やつたとないや陽鞠、おいしい？から揚げ、ちやんと下味

けてるんやから胡椒ふつたらあかんで」

陽鞠 うん
陽鞠の見つめているテレビ画面、再現

ナレーション「そして犯人、黒山勝次は四
ドramaが映し出されていく。

人を殺害した後、支店長席に座ると、自分を守るように女性行員十八人をカウンターの上に座らせた。己を守る人間の盾にしたのである』

画面の中 制服姿でカウンターに座り
されている女性行員たち。 陽鞠の後ろで棒立ちになり、テレビ画
面を視ている佳也子。

佳也子一陽鞠。」

陽鞠「どないしたん、ばあば。顔真っ青やで」
佳也子「テレビ替えて」

佳也子「替えてつて」
陽鞠「あの、なんで――」

佳也子「替えてつて言うてるやん！　言うこ
ときかんかいな！」

ときかんかいな！」

三
二
一

陽鞠「ばあば——」

卷之三

佳也子 我は返り

「嫌いなんよ
のドラマなん

陽鞠れ
「うんの。
分かつた」

え
る
陽
鞠
。

卷之三

佳也子一ごめんな 大きい
陽鞠「ううん、なんにも」

声出したりして

陽鞠。食鳩者如也。食也于見也。食也。

○前同・台所（真夜中）

シンクの前で水をがぶ飲みしている
陽鞠。

「ハシキがせずきた……はあはの言う
きくんやつたな」

二林日報

○前同・佳也子の部屋(真夜中)
ベッドの上で眠っている佳也子。

居間で人質事件のテレビを視ている
陽鞠の後ろ姿。

佳也子「へ替えなさい陽鞠！」

次に変わつてゐる。立ち上がる緑山。髪の色変わつてしまつたんや。

振り向く隣靴
次に変わつてゐる
へどないしたんや

もうてるやないか』

佳也子の髪を触ろうとする緑山。動け
ない佳也子。

佳也子『うわああつ!』

佳也子、悲鳴をあげて起き上がる。

○前同・佳也子の部屋の前の廊下(真夜中)

佳也子の部屋の前を通り過ぎようとしていた陽鞠だったが、突然の佳也子の悲鳴に驚く。慌てて部屋のドアを開ける。

陽鞠『どないしたん、ばあばつ!』

○前同。佳也子の部屋(真夜中)

上半身を起き上がらせ、顔を覆つている佳也子。

佳也子『なんでもない。ちよつと、変な夢み

佳也子『てしもうてな。大丈夫や』

陽鞠『——ほんまに大丈夫?』

佳也子『顔を上げ陽鞠を見る佳也子。

陽鞠『大丈夫や。陽鞠、コップに水一杯汲

佳也子『うんできてくれるか』
陽鞠『うん、分かつた』
佳也子『部屋を出る陽鞠。また両手で顔を覆う

○ 蒼ヶ原高校・二年七組・教室
チヤイムが鳴り、帰宅の用意をして椅子から立ち上がる陽鞠。大きなため息をつく。
「どうないしたん杉原さん」

陽寿道『え?』

「どうないしたん杉原さん」

陽 鞠 「——なにも言うてへんのといっしょや
ん、それ」

寿 道 「前田君との事はなにもよう言わんわ。
きあつたらええつて思うし、つきあいたく
思うんやつたら断つたらええと

杉 原 「前田君との事はなにもよう言わんわ。
きあつたらええつて思うし、つきあいたく
思うんやつたら断つたらええと

○ 前 同 ・ 情 報 处 理 室 ・ 室 内

陽 鞠 「ぼく、ちっさい時から入退院くりかえ
してたやろ。そやから知ってるねん。女の
看護師さんがハアハアため息つくときは
いがい恋の悩みやねん。よう聞かされた
わ『なあトシ君、聞いてくれる』いうて
「そつかあ。それだけやないねんけどな」
寿 道 「それだけやないんや」

陽 鞠 「うん——そや、なあ春野君。わたし
の話しも聞いてくれる。看護師さんらみた
いにやあ」

陽 鞠 「いいや、聞かされ顔つて」

寿 道 「ええよ。聞かされ顔してるんかな、ぼ
う二人。

陽 鞠 「え？」

寿 道 「自覚なかつたんや」

陽 鞠 「コクンと頷く陽鞠。」

寿 道 「恋の悩み？」

陽 鞠 「え？」

寿 道 「今日朝からため息ばかりやで」

陽 鞠 「うなん？」

寿 道 「自覚なかつたんや」

陽 鞠 「うん」

陽 鞠 「ごめん」

は人からアドバイスもらつて決めることが
やないし。もうちよつと考えてみるわ」
寿道 「うん。で、おばあさんの方やけど」

寿道 「ぼく昨日その番組見てへんねん。どこ
の銀行やったつけ」

寿道 「スマホで調べようとかは思わへんかつ
た?」

陽 鞠 「思ったけど、なんか怖あて」

寿道 「うん、分かった」
「パソコンに向かい検索を始める寿道。

寿道 「パソコンの画面を見つめ、スクロール
しながら表示されている文言を読み
始めます。春野君」

「ごめん、ちょっと」

陽 寿 鞠

「うん」
寿道の横顔をじっと見ている陽鞠。や
がて寿道、画面を見つめたまま。
「杉原さん、その番組どこまで視たん」

陽 寿 鞠 「え、そやから犯人が駆け付けた警官二
人と銀行員二人殺して、銀行の女の人らが
犯人との周りに座らされるところまでやけ
ど」「銀行の服着てた?」

寿道 「再現ドラマで犯人の周りに座らされて
え?」

寿陽

「女性行員役の人ら、銀行の服着てた？」

寿陽鞠 「そら、着てたよ」

寿道 「——そやろなあ、夜の七時台にそんな放送するの無理やもんなあ。杉原さん」

寿道、陽鞠を見る。

寿陽鞠 「なによ」

寿道 「実際はな、銀行の女の人は全裸にされ

てる。犯人の緑山に命令されて」

寿陽鞠 「ええつ！ なによそれ」

寿道 「再現ドラマで銀行の服着たままやつたのは放送上の演出や」

寿陽鞠 「そんな、全裸つて……」

寿道 「事実はそうやつたんや。それ見ておばあさん変になつたん？」

寿陽鞠 「うん」「すごい、おかしかった？」

寿道 「うん。わたしばあばに大きい声出され
声たたか初めでや。それに、夜中に叫び
上んなんか初めてや。それで、飛び起きたんかて——」

寿道 「そうか。杉原さん。これ以上関心持た

でええんちやう、この事件」

寿陽鞠 「どういうことよ」

寿道 「誰にかて、知られたくないことってあ

寿道鞠 「——え」「言うてよ」

寿陽鞠 「今度はちゃんと言うてよ。春野君が今

思つてること。あるやろ」

「——人質の一人やつたんやないやろか、

杉原さんのおばあさん」

あばが、人質——」

○前同・職員室前廊下

・職員室前廊下
職員室扉近くの壁際に立つている寿道。礼をして出てくる陽鞠。向かいあ

寿道「田所先生、なんて？」
陽鞠「うん、あの事件のこと

寿道「そっか。あの事件の人質やつたと思
う？」杉原さんのおばあさん

陽鞠「わたし、知りたい。わたしの知らへん
ばあばのこと、わたし知りたいんや」

寿道「なんでそこまで思うん?」
陽鞠「ばあばのことが好きやから。ほんまに
ほんまに好きやからー

陽鞠「うん。この赤い髪な、ばあばからの遺伝。死んだお母さんは飛ばして、わたしに出てんよ、このバーバンディー

陽鞠「わたしのが小三のとき、じいじが脾臓の病気で入院してたんよ。退院する日にお父さんとお母さんが車で迎えに行つてんけどな。その帰りに信号無視してきた車にぶつけられて三人とも死んでしもうたんよ。それからばあばとずっと二人で暮らしてる」

しばらく無言の寿道。
寿道「バー・ガンディイつていうんやな、その色
陽鞠「うん。一代飛ばしで出てるんや。そや
から、ばあばのお母さん、わたしのひいば

陽寿　陽寿　寿　陽寿　○
し鞠道力し鞠道日同・校門を出たところ
の「こらからずつと通つてゐるし」
「うん。市立図書館家から近いから子供
の「春野君、なんかそういうの得意そうや
図書館とか行くんやろ。江夏のナント
のノンフィクション調べるのに」
「そつか。それやつたら、やつぱりわた
調べたこととか書いたこととか、チエ

○前同・校門前
陽寿　鞠道　「うん。地毛の色好きやないんやて。な
どんで、か知らんけど。一回見てみたいんやけ
歩いて行く二人。
「うん。地毛の色好きやないんやて。な
どんで、か知らんけど。一回見てみたいんやけ
歩いて行く二人。
校門前まで歩いてくる陽鞠と寿道。
寿道、陽鞠の少し後ろを歩いている。
振り返り寿道を見る陽鞠。
「え？」
また歩き出す二人。

陽寿　鞠道　「あはは黒髪。ひいひいばあばは、バーガン
デイやつてんて」
「あははずつと黒に染めてる」
「うん。地毛の色好きやないんやて。な
どんで、か知らんけど。一回見てみたいんやけ
歩いて行く二人。
「あは」

寿道 ツクしてえや。あかん?」

陽鞠 「こんなこと訊いてええのか分からんの
やけど——どこが悪いん?」

寿道 「先天性の心臓病なんや。一歳の頃から
今まで六回手術受けてる」

寿道 「うん。七回目かでいつあるか分からん。
激しい運動は厳禁や。そやから体育の授業
はずつとレポート提出。まあ、それはそれ
で性に合ってるんやけど」

寿道 「え?
陽鞠 「ラインの交換しよや。図書館行く予定
とか決めやなあかんやん」

陽鞠 「うん」

寿道 「学生カバンからスマートフォンを取
り出す寿道。ラインのアドレス交換を
する二人。ツレやな」

陽鞠 「え?」

陽鞠 「わたし、ガチのツレとしかラインせえ
へんし」
微笑む陽鞠をじっと見る寿道。

○ 杉原家・陽鞠の部屋(夜)
「数学の問題集に取り組んでいる陽鞠。
終わらす!
終わらせるぞお!」

○ 杉原家・玄関（朝）
ナツブザツクを背負い、私服で出かけ
ようとしている陽鞠。見送つて いる佳
也子。
佳也子「あんたが図書館行くやなんてなあ」
陽鞠「なによ」
佳也子「大雨降らんかつたらええけど」
陽鞠「うるさいなあ。頼りになる相棒 いてる
から 大丈夫なんや」
佳也子「お昼はほんまにええんやな」
陽鞠「うん。コンビニでなんか買 うから。そ
したら行つてきまーす」
玄関を出る陽鞠。

○前同・一階フロア（朝）
陽鞠「うわあ、本だらけや」

寿道「そら図書館やもん。ここだけちゃうで。
二階も三階も本だらけやで」
貸し出しカウンターへ向かう寿道。つ
いて行く陽鞠。

○前同・貸し出しカウンター

寿道、座っている司書の丸川梨乃（3
2）に。

寿梨乃「何年何月のやつ？」
寿道「だいぶ古いんやけど、1979年の十
月と十一月。とりあえず今日は朝日と読売。
ある？」

梨乃「ここをどこやと思つてるのよ。なにか
調べるもの？」
寿道「うん。日本史の自由研究」
梨乃、陽鞠を見る。

寿梨乃「お友達？」
寿道「え、あ、うん。いつしょのクラスの杉
に原さん。テー・マ違うけど、ここでいつしょ
に調べよかつて」
会釈する陽鞠。

寿道「ほら、杉原さんも」
阳鞠「あ、わたしありがとう」と――

寿道「あ、そや。わたしも同じ1979年の
二月の縮刷版を見たいです」
阳鞠「あ、そや。わたしも同じ1979年の
二月の縮刷版を見たいです」
寿道「うわあ、本だらけや」
阳鞠「あ、わたくしも、えっと――」
寿道「ほら、杉原さんも」
阳鞠「あ、わたくしも、えっと――」
寿道「あ、そや。わたしも同じ1979年の
二月の縮刷版を見たいです」
阳鞠「あ、そや。わたしも同じ1979年の
二月の縮刷版を見たいです」

寿道　「事件があつたのつて一月の末やろ。二月の新聞にもその後の経過とかいつぱい載つてる思うで」

梨乃　「そつか。じゃあ二月のもお願ひします」

月の朝日、読売の縮刷版やね。ちょっと待つててな」

立ち上がり書庫へ向かう梨乃。

陽鞠　「めっちゃフレンドリー！」

寿道　「そら小学生からのつきあいやもん」

陽鞠　「やつぱりいっしょにきてもらつてよかつた。頼りになるわあ」

照れくさげに笑う寿道。

○前同・一階フロア（朝）

陽鞠　「けつこう、重い……」

寿道　「大丈夫か？」

陽鞠　「首を横に振る寿道。」

寿道　「大丈夫や、これくらい」

歩き始める寿道。陽鞠も。

○前同・一階フロア（朝）

陽鞠　「機の上に縮刷版四冊を抱え歩いて行く二人。

陽鞠　「寿道、途中で止まり大きく息を吐く。

陽鞠　「振り返つて。」

阳　　「ぼく、もつと向こうの席に座るから」

寿道　「え、なんですか？」

「こういうことはな、まずは自分の世界に没頭してやるものなんや」

阳　　「ボットー」

寿道　「前同・閲覧席（朝）」

阳　　「阳鞠」

陽鞠「うん、そつか。そやんね」
「頷く寿道。」

離れた席へと歩いて行く妻

道陽

陽鞠「よつしや、ボットー開始や」
朝日新聞縮刷版、後半あたりの。。

陽鞠 「いきなり当たるつてか」
「犯人を狙撃 人質全員救う」の一面
大見出しど、毛布で体を覆われ、警察
官に付き添われ歩いて行く女性の人
質たちの写真が掲載されている。しば
らくその写真を見ている陽鞠。やがて
ペーパーを揉つて、いき社会面へ。

陽鞠 「うわっ」
「狙撃され、顔中血まみれの犯人、緑山
が担架に乗せられ運ばれていく写真
が掲載されている。
こんな写真、載せてもええのん……」
記事を読み進めていく陽鞠。

縮刷版を読みふけつている陽鞠。やつ

寿道 「杉原さん」 てくる寿道。
寿道 「杉原さんって」 陽鞠、気づかない。
「外行こか。もうお昼や」 顔を上げる陽鞠。
微笑む寿道を見て頷く陽鞠。

○コンビニエンスストア・イトインコーナ

横並びに座り食事をしている陽鞠と
寿道。陽鞠はサンドイッチにオレンジ
ジュース。寿道はおにぎりにお茶。浮
かない顔の陽鞠。

「全然いやべらんし」

「え」「図書館出でからずつと」

「うん。キツイわ正直」「うん。けど新聞記事読んだら、なんて
「うか、リアル感の圧をすごく感じるんよ。」

「ほいほいうまに酷い事件やったんやなあつて、実感するつていうか——めちゃくちややつ

「べーうん——人質どうしで耳——ごめん、
「かまへん、食べてるときにする話やな」

「ふいふいこと調べてるんやから。ほんま、死んだりしてる人の耳、同じ人質に削がさせれる
やなんて、どんな神経してんのや」

「おばあさん、人質やつたつて、やつぱり思つてゐる？」

「正直、分からへんくなつてる」「それ、確かめたい?」「寿道を見つめ、小さく頷く陽鞠。

「二つだけ。朝晩は五つ。これでも
二つは二錠置き、陽鞠を見て笑う。二錠ボトルを取り出す寿道。掌に薬を注入。陽鞠は寿道を見つめる。寿道を見つめて、やつぱり思つてゐる？」

「寿道

「昼は二つだけ。朝晩は五つ。これでも

少なくなつた方」
ペットボトルの水で薬を飲み下す寿
道をじつと見ている陽鞠。

○大阪市立中央図書館・一階フロア
縮刷版をコピーしている陽鞠。

○前同・エンタランス

向かい合っている陽鞠と寿道。

寿道「そしたら、今日はこれで」

陽鞠「やつぱり、春野君の言うたこと正解や

寿道「え、なにが？」

陽鞠「二月になつても事件の記事たくさん載
つてゐるわ。なんであんな酷い事件がおきた
んか、記者の人人が一生懸命追つかけてるの、
よう分かるわ」

寿道「リアル感の圧やな、昭和の」

寿道「うん、ほんまに」

陽鞠「うん。春野君はちつきい時からここに

陽通つてたんや」

寿道「うん、ここで本ばっかり読んでた——
つて今でもやけど。そしたら三日後」

「うん」去つていく寿道。その背中を見送つて
いる陽鞠。

陽鞠「春野君！」

陽鞠「振り返る寿道。
ぐ近くにあつて！」

陽鞠「あんたええなあ、こんなええ図書館が

寿道「ここ、ぼくのホームグラウンドや！
杉原さん、今日いつしょにここ来れて、なんかすごい嬉しい嬉しかつたわ！ ありがとう！」昭和に負けんとこな！ さいなら！」

寿道、晴れやかな笑顔で手を挙げ、振る。陽鞠（M）「うわ、これ、ヤバいんちやう：」

陽鞠「うん、さいなら！」

陽鞠も手を挙げ、振る。逆方向へ歩き

出す二人。陽鞠「マジで、ヤバいかも……」

○ 杉原家・居間（夜）

向かい合って食事をしている陽鞠と

佳也子。「図書館でよう勉強できたんか？」

佳也子「え、あ、うん。まあ」

佳也子「なにを調べてるのんや」

佳也子「えーーえっと、あんな、プロ野球の試

合のこと、調べてるねん」

佳也子「あんた野球なんかそないに好きやつた？」

陽鞠「隣の席の子がな、野球が好きでな、い

つしょに調べてるんよ。それに、これでもい

元ソフト部やし「へえ、そうかあ」

しきりにせやねん」

阳鞠「髪の毛を触りだす。

阳鞠「隣の席の子がな、野球が好きでな、い

つしょに調べてるんよ。それに、これでもい

元ソフト部やし「へえ、そうかあ」

しきりにせやねん」

阳鞠「髪の毛を触る陽鞠。

○ へ大阪球場・1979年の日本シリーズ第七戦、九回裏の場面へ

江夏 豊の九回裏 19球目、三塁走者藤瀬史朗がホームへ走る。打者、石渡茂がバントの構えをする。スクイズ敢行。すかさず立ち上がるキャッチヤーの水沼四郎。カーブの握りのままウエスボールは水沼のミットに収まる。本塁手前まできていた藤瀬、慌ててサードベースへ戻ろうとするが、その背中に激しくミットを叩きつける水沼。大喜びの広島ベンチ。マウンド付近に集まり江夏を称える広島内野陣。

その映像に重なる陽鞠と寿道の声。
「（声）「杉原さん、ごめん。夜遅くに」「（声）「かまへんよ、どうしたん」「（声）「すごいことが分かつたんや。』江の21球』は、ほんまは『江夏の14球』
つたんや！」

（声）「え、どういうことなん？」
（声）「（声）「なに言うてるか分からんやんね。
まり、事実と真実は違うんや！」

（声）「（声）「事実と真実は違う」……」
（声）「（声）「明日、学校の情報処理室に来て
あるんや。あかんかな」視てほしい動いて
うん、「ええよ。何時にする？」
うん、とか、あかん？ ？」

（声）「ええよ。何時にする？」

寿道（声）「いつしょに見て、思つたこと
か言うてほしい」「うん、分かつた」

○ 蒼ヶ

原高校・情報処理室（朝）
椅子を寄せ合つて座り、パソコンの画面
を観てゐる陽鞠と寿道。映し出されて
いるのはNHKで放送されたへNH
Kスペシャル『江夏の21球』。

寿道

「ここ、ここなんや！」

画面に映し出されているのは、九回裏、
江夏の14球目を捉えたバッタ一
佐々木恭介。ワンバウンドした打球は、
ジヤンプして捕球しようとした三塁
手の三村敏之の出したグラブの先を
掠め、ファウルゾーンへ。三塁審は、
ファウルの判定を下す。
そこで一旦画面を止める寿道。

寿陽

鞠
寿道「佐々木が打つた球が跳ねたのはフェア
ゾーン。サードの三村がジャンプした位置
ももちろんフェアゾーン。そやから打球が
三村のグラブに触れてたらファウルやな
けどサードやつてん。それくらい分かるわ
」

陽

鞠
寿道「あの打球がフェアやつたら、三塁ラン
ナーノの藤瀬は当然ホームイン。二塁ランナー
の吹石も代走で足は速い。三塁コチの逆の
転仰サ木さんも近鉄は優勝してたんや」

寿 道 鞠 「うん」「え」「触つてたんや」

寿 道 鞠 「サードの三村は佐々木の打球、グラブの先で触つてた」

葉の挟まれた一冊の本を陽鞠に差し出す寿道。文春新書、二宮清純著の『プロ野球「衝撃の昭和史』』である。手に取り、葉のページを開く陽鞠。

寿道 「この本読んで知ったんや。佐々木恭介さん、1994年に『遙かなる野球少年』つて本を出してる。その時にな、三村さんに、あの十四球目のこと訊きに行つたそや」

開いたページに目を落とす陽鞠。螢光ペンで塗られた箇所を音読し始める。

陽 鞠 「あれ、どうやつたんですか?」と。最初は"しゃべれんぞ"と言われたんですけど、"まあまあ、そう言わんと。別にそれだけを取り上げるわけじやありませんから"と粘つた。すると"触つた。グラブにすつたんや"と正直におつしやいました。あそこで"しまつたー!" "くらい言つてくれれば良かつたんですけど(笑)~なにこれ、すごいことやろ、これつてうん。めつちやすごいこと。プロ野球道の歴史が変わつてたんやで」

陽 鞠 「そやのにカッコ笑い」つてなんなん。悔しかつたはずやん、佐々木つて選手。意味分からへん

寿 道 「うん。佐々木さんが悔やんではそ

の前の十三球目を見逃したことなんや』マウスを操作し、画面を少し前に戻す

寿道。江夏の投げた九回裏十三球目のストレー卜をあつさり見逃す佐々木。

陽鞠『あれは一生の悔い。もう四、五十回、同じ夢を見ています』——そやけど、そやけどさ。ほんまは三村のグラブに触つてたんやろ』

陽寿道『それがちやんと判定されてたら、『江夏の21球』は『江夏の14球』で近鉄が

優勝してたわけやろ』

寿道『『三村』『真実は』電話で言うたやろ』事実と真実は違う』

つて』

阳寿道『またマウスを操作する寿道。

画面の中、江夏の投げた十四球目を打つ佐々木。横つ飛びでファウルゾーンに飛び込む三村。ボールはファウルグランラウンドへ。その映像とダブつて三村の顔が映り、語る。

【三村】『へああ、ファウルか、ああ、よかつたな、思つたんですねよ。まあ、ぼくがあんまり背が高くなくてよかつたな、思つたんですよ。もうなまじつか大きくてね、少しあれでもグラブに当たつたりしてるともうアになつてますからねえ』画面をストップさせる寿道。

陽鞠『めつちや嘘言つてるやん、この三村つ

寿道「うん、嘘やんな。けど杉原さん、自分が三村さんと同じ立場やつたらどう?」
阳鞠「え」
寿道「こんなインタビュー受けて『いや、あれ実はグラブに触つてたんですよ』とか言える?」
阳鞠「それは——無理」
寿道「やんな。誰かでそうやと思う。けど、時間がたつてからやけど、それをちゃんと佐々木さんに言うた三村さんも、その前の十三球目を打たへんかったことをずっと悔やんでる佐々木さんもすごいなあ。一流のプロの心つて、ほんまにすごい。ぼくはそういう思う」
(M)「あ、またヤバい……」
寿道「小説家になれたらなつて、思つてた。ならええなあつて思つてた。けど、そんなん無理やろなつて思つてた——今は違う」
阳鞠「違うのん?」
寿道「ぼくは、スポーツのノンフィクションライターになりたい。一流のプロアスリートの心技体に迫れる、ライターになりたい。運動できひんぼくやからこそ掴める真実があるはずなんや。どうなつたらなれるやんて分からへんけど、絶対になりたい。陽鞠、ストップモーションの三村敏之の顔を観ていてる寿道の横顔をじつと

陽鞠(M)「（あかん。完全にヤバいの超えた、
今こんで……）」

陽鞠「うん。なれるよ春野君やつたら。そん
なライターに。絶対なれる」

寿道、陽鞠を見て微笑む。

寿道「ありがとう。杉原さんにそない言うて
もらえると、ほんまになれそうな気がして
きた」

陽鞠「——春野君」

寿道「なに」

陽鞠「わたしもやっぱり真実が知りたい」

寿道「おばあさんのこと」

陽鞠「頷く陽鞠。」

「今晚、確かめる」

陽鞠も画面を視る。

○ 杉原家・居間（夜）

食事後。見つめ合つて座つている陽鞠
と佳也子。

陽鞠「以上、ばあばは七星銀行東里支店立て
こもり事件の人質やつたつていうのがわ
たしと春野君の最初からの推測や。どうな
ん、ばあば」

佳也子「——野球のこと調べてるんやなかつ

佳也子「たんか」

陽鞠「そんなん嘘やつて分かつてたやろ。わ
たしばあばになにを調べてるか訊かれたり
とき、めつちや髪さわつてたやろ、後で自
分で気がついたんやけど」

佳也子「——」

陽鞠「子供のときばあば言うたやん。わたし
がなんかしょうもない嘘ついたときや。」

佳 陽 鞠 「ようう覚えとき、あんたは嘘つくとき髪触る癖があるんや」つて。そんで頬つぺた思いつきりつねつたやん。めつちや痛かつたわ。久しぶりについた嘘やからつい癖が出たみたいやわ」

佳 也 子 「嘘はつかへん約束、あのときしたはずやのにな」

佳 陽 鞠 「そやな。けどばあばも嘘つきや。ずっとずつとの嘘つきや」

佳 也 子 「陽鞠、あんた」

佳 陽 鞠 「ほんまは赤い髪やのに黒に染めて。わ好きや。そやから学校に地毛証明書出してる。サマルカンドの沖村さんにハンコついてもらつて、そんなアホみたいなもん出してる。けどばあばは黒に染めてる。嘘の髪の毛でずっと生きてる。大嘘つきはどうちやのん」

佳 也 子 「陽鞠つ！」

佳 陽 鞠 「なんにも分からへんわ！」

佳 也 子 「なんやのん！」

佳 陽 鞠 「なんにも分からへんわ！」

佳 也 子 「あんたにわたしのなにが分かるんや！」

佳 陽 鞠 「なんにも分からへんわ！」

佳 也 子 「なんを隠すん！なんであんな大きな声でチンヤンネル替えろって言うたん！なんでチンヤンネル替えろって言うたん！隠し事しあんて嘘ついてるのは、ばあばの方やんか！」

佳 陽 鞠 「じつと見つめる佳也子。その視線を外さない陽鞠。

陽鞠「なあ、あの銀行に勤めてたんやろ。事

件の時裸にされて、犯人の周りに座らされたんやろ」
佳也子「そんなに知りたいんか、あの事件のこと」
陽鞠「知りたい。ばあばがずっとしんどい思いしてきたんやつたら、よけいに知りたいお父さんとあ母さんとじいじ、いつぺんに死んでから、二人で生きてきたんやんばあば」
佳也子。ため息をつき首を横に振る。

佳也子「七星銀行の東里支店には勤めてた。けど、あの事件のときにはもう退職してた」「——そう、なん?」
佳也子「そや。今、料理教室で助手やつてたときや。あの事件が起きたのは」
佳也子「ほんまに人質やなかつたん」
佳也子「陽鞠——わたしが体許した男は順平、あんたのじいじだけやない。もう一人いてる」
阳鞠「え?」
佳也子「あの人質事件の犯人、緑山勝次が、たしの最初の男や」
息を呑む陽鞠。

○七星銀行東里支店・外景
H.T. 1978年2月

○前同・店内

カウンターに座り接客をしている女性員たち。その中に23歳の日野佳也子がいる。その髪は紫がかつた鮮や

かなかバー・ガンディ。にこやかに接客をする佳也子。

入店してくる男、緑山勝次。空いていた佳也子のカウンター前に立つ。

佳也子「いらっしゃいませ」
通帳作りたいんやけどな、ここの持ちでしょうか」「はいはい、お持ちいただいております」と

緑山「あ、地毛なんですこれ」
佳也子「地毛！ほんまに？」
佳也子「はい。みなさん驚かれます」
佳也子「そつか。日野さん、ボクこういう仕事をねん」
緑山「あ、地毛なんですこれ」
佳也子「はい。みな驚かれます」
緑山「はい、ありがとうございます」
佳也子「はい、ありがとうございます」

緑山「名刺を差し出す緑山。『パブ・ドルチエ・ノット』『フロントマネージャー』」
緑山「勝次」と書かれている。

佳也子「よかつたら取つといてえや」
佳也子「はい、ありがとうございます」

緑山「フロントマネージャーとかたいそうに書いてるけど、要是ただのバーテンや。パブとか行つたことある？」

緑山「はい、ありがとうございます。なに

かご身分を証明できるものとご印鑑はお

持ちでしょうか」「はいはい、お持ちいただいております

ポケットから印鑑と財布の中の免許証を取り出し、差し出す緑山。佳也子、クスっと笑つて。緑山、佳也子の名札を見て。

髪、ええ色に染めてるんやね、日野さ

佳也子「佳也山もん山」「あ、地毛なんですこれ」
佳也子「はい。みな驚かれます」
佳也子「そつか。日野さん、ボクこういう仕事をねん」
緑山「あ、地毛なんですこれ」
佳也子「はい。みな驚かれます」
緑山「勝次」と書かれている。

佳也子「よかつたら取つといてえや」
佳也子「はい、ありがとうございます」

緑山「名刺を受け取る佳也子。」

緑山「フロントマネージャーとかたいそうに書いてるけど、要是ただのバーテンや。パブとか行つたことある？」

佳也子「佳也山もん山」「あ、地毛なんですこれ」
佳也子「はい。みな驚かれます」
佳也子「そつか。日野さん、ボクこういう仕事をねん」
緑山「あ、地毛なんですこれ」
佳也子「はい。みな驚かれます」
緑山「勝次」と書かれている。

佳也子「よかつたら取つといてえや」
佳也子「はい、ありがとうございます」

緑山「名刺を受け取る佳也子。」

緑山「フロントマネージャーとかたいそうに書いてるけど、要是ただのバーテンや。パブとか行つたことある？」

佳也子「いえ」
緑山「友だち誘つておいでえや。女の子でも安心して楽しくお酒飲める雰囲気づくりに励んでるんやでえ」
佳也子「そうでらっしゃいますか。いつかぜひ。では、こちらの用紙の太枠の中に入必要事項をご記入くださいませ」
「はーい、ご記入くださいますよっと」
またクスッと笑う佳也子。

○前同・女子更衣室

業務を終え着替えをしている佳也子と同僚の増山香里（23）と岡崎美幸（23）。

香里「なあ、佳也子」

佳也子「あ、うん」
香里「あんた今日お客様から名刺もらつてたやろ。ええ感じに崩れた雰囲気の男の人から」

佳也子「あ、うん」

佳也子「え、ほんまに。見せてえや、それ」
佳也子「ええよ」

バツグから名刺を出し二人に見せる

香里「『パブ』『ドルチエ・ノッテ』フロントマネージャー緑山勝次』やて」

佳也子「バー・テンさんやねんて。女でも安心して飲める店や、みたいなこと言うてた」
美幸「ほんまにい。そしたら今月給料出たら行つてみようや、三人で」
香里「ええやん、それ。わたしパブなんか行つたことない。佳也子は？」

佳也子「わたしもなない」
美幸「わたし、哲也と行つたことがあるわ。なあ、ほんまに行こ三人で。佳也子の退職前祝いや」

香里「うん。けどワリカンやで」
佳也子「なによそれ。どこが前祝いやのん」
香里「三人で行つてやで、一人分二人で持つのは痛いわあ。なあ美幸」
美幸「そらそりや。奢つてもらうのは支店のお別れ会のときでええやんか。友情の証し」としてその日はワリカン。当然や」
佳也子「なにが友情の証しやのん」

香里「それにな佳也子。あんたまた会いたいつて思つてやろあのバーテンさんに」
佳也子「べつに、そんなことないよ」
香里「いや、思つてやる。なんやしらんボーッとしてるもん、あんた。あの人接客してから、今日」

美幸「お、お、おお。ついに佳也子ちゃんが大事に守り続けてきた純潔が散らされちゃうときがやつてきましたかなあ」
佳也子「そやからそんなん違うつて」
名刺をバツグにしまう佳也子。着替えを済ませた三人、楽し気にはながら衣室を出ていく。

○ パブ・ドルチェ・ノッテ・入口（夜）
歓楽街にある店に入つていく佳也子、

○ 前同・店内（夜）

カウンター内で正装した緑山が立つ

ている。「本日はようこそいらっしゃいました。

ボックス席へどうぞ」ボーカス席へ三人を案内する。並んで座る美幸と香里。向かい合

緑山「うん」「オシャレなお店やんね」

香里「やつてくる緑山。

緑山「こんばんは。改めましてようこそいらっしゃいました——佳也子さんからご予約のお電話、いたいたいたとき嬉しかったわ」「ちよつともうなにそれえ」

佳也子、「俯いている。

山力山を見ていた内でシェーカーを振る緑

佳香美也里幸子「ほんまに見ええた内に彼、なあ佳也子さん」「ちよつともう怒るで」

佳也子、「真剣な表情の緑山を見つめる佳也子。

× × ×

× × ×

緑山「本日はようこそいらっしゃいました。ボックス席へどうぞ」ボーカス席へ三人を案内する。並んで座る美幸と香里。向かい合

香里「うん」「オシャレなお店やんね」

香里「やつてくる緑山。

緑山「こんばんは。改めましてようこそいらっしゃいました——佳也子さんからご予約のお電話、いたいたいたとき嬉しかったわ」「ちよつともうなにそれえ」

佳也子、「俯いている。

山力山を見ていた内でシェーカーを振る緑

佳香美也里幸子「ほんまに見ええた内に彼、なあ佳也子さん」「ちよつともう怒るで」

佳也子、「真剣な表情の緑山を見つめる佳也子。

× × ×

× × ×

ボーライに告げカウンターの中から出る緑山。

佳也子の隣の席に座っている緑山。

×

緑山「そうか、佳也子ちゃんは来月で仕事やめるんか」

香里「そう、こいつは裏切り者。いっしょに

七星銀行入った銀嶺短大卒三人組の裏切り者や」

幸也子「ほんまや」

佳也子「そんなん、言わんといてえや……」

香里「アホ、誰が本気で言うてるんよ」

緑山「料理の道に本氣で進みたくなつたんやな、佳也子ちゃんは」

頷く佳也子。

緑山「なあ、三人のこと当てたろか」「え、わたしらのことって？」

緑山「美幸ちゃんは彼氏いててうまいこといつつてた人いる。香里ちゃんは、そやなーーつきあつてた人いてたけど最近別れた。ちがう？」

香里「ま、こういのも商売のうちや」

「そしたら、佳也子は？」

香里「言うてええ？」

俯いてカクテルグラスを持っている

佳也子を見つめる緑山。

緑山「きれを横に振る緑山。赤い髪やなあ」「首を横に振る緑山。赤い髪やなあ」「バージンと頷く佳也子。佳也子：変ですか」「佳也子ちゃんは」

緑山を見る佳也子。微笑んでいる緑山。

○七星銀行東里支店・前の路上

業務を終え、銀行から出てくる佳也子。
路上に停車している赤いスカイライ
ンからブブツとクラクションの音。目
をやる佳也子。

「ハロー、佳也子ちゃん」

佳也子「香里ちゃんと美幸ちゃんは?」
高校のときの女友だち三人と男の子三人

とコンパやるつて、とつとと」

連で山也子「ははつ、『とつとと』かあ。明日日曜
休みやろ。三人連れて六甲山の夜景見に

てつたろ思つたんやけどなあ」

山也子「俺、土曜日月二回は休みとることにし
てるねん。できる人間がいちばん忙しい曜

日かん?」「そうなんですか、あの——」

佳也子。「そういっていい佳也子。
手伸びし助手席のドアを開ける緑
山。乗り込む佳也子。

○車の中

運転をしている緑山。無言の佳也子。
カーラジオのスイッチを入れる緑山。
流れてくれる。ズの『やさしい悪魔』が

緑山「来月いよいよ解散か、キャンディーズ』『やさしい悪魔』をハミングする緑山の横顔を見つめる佳也子。

○ステーキハウス・店内

テープル席で向かい合つてステーキ

を食べている佳也子と緑山。

「おいしい?」

佳也子「はい、すごく。あの」

佳也子「お酒、飲まはらへんのですか」

緑山「女の子連れて六甲山行くのに飲酒運転はできんよーーちょっと」

ボーイを呼び止める緑山。

佳也子「シャトーマルゴーの69年、ある?」

ボーイ「はい、ございます」

佳也子「グラスで彼女に」

ボーイ「え、そんなんええですよ」

ボーイ「頼んだで」

立ち去るボーイ。緑山、佳也子を見て。

緑山「料理の道に進むんやろ。ええ肉にはえ

え赤ワインや。知つとき」

緑山を見つめ頷く佳也子。

○六甲山上展望台(夜)

肩を並べて眼下に広がる神戸の夜景

を見ている佳也子と緑山。

佳也子「うわあ、きれい!」

緑山「やろ。まさに百万ドルの夜景や——英

子もここに連れてきたったとき、えろう喜

緑佳
山也子「でたわ」「え」

「いつしょに住んでる女とちよつと大きいケンカしてしもうてな、出て行つてしまつてん。けど居場所の見当はついてる。ツレのところ泊まり歩いてるか、実家にいる。近いうち迎えにいくつもりや」

緑佳
山也子「うん」「そうなんや」

佳也子の肩を抱き、引き寄せる緑山。一瞬驚くが、緑山に身を預ける佳也子。

佳也子「遊びなんやつたら、本気で遊んでよ」見つめ合い、キスを交わす二人。

○ ラブホテル・部屋（夜）

ベッドの上、佳也子の上に覆いかぶさり、ゆつくり腰を動かしている緑山。

佳也子「痛いから」「ちやんとつけてるから安心し」

優しく佳也子の髪を撫でる緑山。
佳也子の声、痛苦の中にやがて少しづつ喜悅の響きが混じり始めて。

× ×

ベッドに腰掛けビールを飲んでいる佳也子、シーツを体に纏うようにして緑山の背中を見ている。胸に墨入れるつもりでな、俺」

緑山

佳也「墨？」
佳也子「入れ墨や。箔つけたろ思つてな。英子
佳也子「そう——戻つてきたらええね、英子

佳也「ん？」
佳也子「羨ましいなあ、それだけ愛されて」
佳也子「——なあ、どうやつた、わたし」

緑山、「そやな、新鮮やつたわ。処女抱いたん
久しぶりや。乳首まつピングクで興奮したわ」

佳也子「スケベえ」
緑山の背中に抱きつく佳也子。笑いあ
い、そのままキスをする二人。

○居酒屋・外景(夜)
大きな店構えの居酒屋。暖簾が出てい
る

○前同・店内・座敷席(夜)
賑わっている店内の座敷席。七星銀行
東里支店の従業員たち三十人ほどが
座つている。上座、立つて挨拶をして
いる支店長の船曳(45)。

船曳「えー、ということですな、今年度末
をもつて、受付顧客業務を担当してくれて
いた日野佳也子さんが退職されることは思
いりますが、日野さんは現在通われ
る料理教室において、その腕を存分に見
込まれ、まさに発達されました。みなさんお聞
き及びのことや

佳

涙ぐみながら深く頭を下げる佳也子。
拍手が沸き上がる。

白羽の矢を立てられることはとなりました。当支店といたしましては、本当に、なんと言いましょうか、今、彼女に辞められるのは、痛恨の極みといったところもあるのです。が、新たな道、新しい夢へと旅立つ日野さんを、快く、気持ちよく送り出してあげましょう。では、日野さん、どうぞ」

座る船曳。全員の拍手。立ち上がる佳也子。深く礼をしてから頭を上げる。

也子「あの、本日はわたしのためにこのような席を設けてくださつて、本当にありがとうございます。お世話になつて丸三年、ずつとここで働きたい気持ちもあつたのですが、短大時代から通つていた料理教室から助手として勤めないかとのお声がけをいただき、迷いに迷つたのですが、新たな道に進むことに決めました。船曳支店長はじめ諸先輩方には時に厳しく、常に温かくご指導いただけた事、そして短大の同級生、香里、美幸と励ましあいながら働けた事、一生の財産です。宝物です。忘れません。東里支店で働くことができて、本当によかったです。みなさん、ありがとうございました。」

美幸「あんた、ほんまにええのん？」

佳也子「なにが？」

香里「なにがつて、バーインさんのことには決まつてるやん」
佳也子「うん、ええねん。遊びやつて割り切つてたし、バージン、もう重かつたし。捨てるにはちようどええ感じの人やつたわ。向こう本気で好きな女の人いてるし」

美幸「まあ、佳也子が本気で恋人としてつきあうにはワルっぽすぎたかなあ」
佳也子「うん。さすがに入れ墨するような人とずっとつきあうのは無理やわ」

香里「確かにな」
佳也子「なあ、香里、美幸。またいっしょにご飯行つたりしよな。旅行いつたりしよな」

佳也子「頷き、笑いながら佳也子の髪をクシヤクシヤする香里と美幸。
佳也子「もう、やめてえやあただ嬉しそうな佳也子。」

○七星銀行東里支店・行内

フロアに警察官二人と、支店長船曳、男性行員の鈴木の二人が横たわっている。それぞれの床に血だまり。四人とも死んでいる。フロアのすみに人質となつた客たち、二十名ほどが固まつて怯えながら座つている。

支店長席に獵銃を肩がけにして座つているチロリアンハットにサングラスの縁山。カウンターに女性行員十八人を全裸にして座らせている。その中

に香里と美幸も隣あわせでいる。

二ヤ二ヤ笑つてゐる縁山。後ろから獵

鉢を香里の頬に当てる。ビクつとなる香里。緑山、席から立ち、

二人の間に顔を入れ、肩を抱き寄せる。そして二人だけに聞こえる声で。

香里ちゃんと美幸ちゃんやんな。記憶

力者や借金の取り立てでたがらな俺。人の名前きつちり覚えるのも仕事

のうちやねん」震えてハる香里ヒミツ幸福。

緑山「どこに押し入つたろかいろいろ考

「ほんとやうやく、あたしは三つともわざわざおもひだして、あなたに会うことをやめました。なんせここ、処女貰た女の勤めてたんや。帽子被つてグラサンとマスクしてたら銀行やろ。ゲンがええつて思つて決めたんや。君らも気いつかへんやろ思つてな。けど、裏目に出てたわ」

震え続いている香里と美幸。
今でもつきあいはあるん?

んと？」なあ、香里ちゃん」

緑山「そつか、仲ええんやな。なあ、後でボ

りになにかいろいろ訊かれても、佳也子ちゃんのことは黙つといたりや。一晩だけでも抱いた女に迷惑かけたあない——おい、

えら分かつたんかい」

縁山、支店長席に坐り直す。

山一早い事金出さへんからこないなことになつたんじや！ 絶対金持つて上手い

絶対金持つて上手い

ことここ抜けたるからな、クソが！」
が天井に向けて発砲する緑山。悲鳴が上
る。

○酒問屋・駐車場（朝）

でいる杉原順平（24）。社長の神保（5

5）がやつてくる。

神保「おはようございます！」

神保「おはようさん順ちゃん。しかし、えら

神保「まだ犯人、捕まつてないんですか？」

神保「ああ。ずっと銀行のシャツター閉まつ

神保「まんま。進展なしや」

神保「そうですか」

神保「あ、そやそや順ちゃん、聞いたで聞い

神保「たで。先月から彼女とアパートで同棲して

神保「そややないかあ」

神保「そのから、半同棲っていうか」

神保「この先も考へてるんやろ」

神保「それは、まあ——はい」

神保「仲人、遠慮せんと頼んでや。記念の十

組目が順ちゃんやつたら、俺も嬉しい限りで。料理上手の嫁さん、最高やないか

く去つていく神保。苦笑する順平。力強

ボロアパートである。

○前同・203号室（夜）

里支店の様子が映し出されている佳也子と順平。テレビ画面を観ていて

順平「ほんまによかつたな。そのまま勤め佳也子「けど、けど、香里や美幸が——」

アナウンサーへ声」「ただ今、警察から発表がありました！」警官二人と行員二

人を射殺し、人質を取り現在も立てこもりを続けている男の名前は緑山勝次、三十九歳！現在の職業は不明ですが、かつて大阪市内のパブでバー「テンドラー」をしていた男は元バーテンダーとしている。

順平「元バーテンダーか」

順平「大丈夫や、香里ちゃんも美幸ちゃんも絶対無事に解放されて出てくるよ」

○前同・トイレ（夜）
便器を前にうずくまる佳也子。ゲー
ゲーと吐く。

○大阪

市内の上空報道へり三機が七星銀行東里支店、上空を飛んでいる。

○七星銀行東里支店・外景

警官隊、機動隊員たちが支店周囲を取り囲んでいる。大勢の野次馬たちもいる。

ヘリのローター音に重なるアナウンサーオの声。

アナウンサー（声）「へ緑山勝次が客や銀行員四十名近くを人質に取り、七星銀行東里支店に立てこもつて三日が経ちました。緑山は警官二人、行員二人を猟銃にて射殺。母親の説得にも応じず、立てこもりを続けています。警察は銀行三階に捜査本部を設置。電話で緑山との接触を試みている模様。未確認情報もあります——」

緑山（声）「殺す、ぞ……」

○七星銀行東里支店・外景

支店の閉じていたシャツターが三十センチほど開けられ、その間から警察官たちが次々と匍匐前進で入ってい

アナウンサー（声）「へあ、あつ！ 今、閉じていったシャツターが少し開けられ、警官隊、機動隊員たちが次々に行内へと、入つています！」

事件に動きが、何らかの動きがありました！」

○前同・外階段

警官に支えられながら、毛布をかぶせられて、外階段を降りてくる人質たち。

その中に香里と美幸もいる。

(F・O)

○ 杉原家・居間(夜)

じつと見つめあつてゐる陽鞠と佳也子。

陽鞠 「じいじは、知つてたのん?」

陽鞠 「訊いてるやん」

陽鞠 「そつか。なんかそれ聞いてほつとした。
それから、髪、黒に染めるようになつた
ん?」

頷く佳也子。

佳也子 「陽鞠、お願いや。そこから先はもう

陽鞠 「うんまに訊かんといて。お願いや」

佳也子の目から涙が零れる。

佳也子 「悪い子や陽鞠は。あの事件のこと調べたりして、ほんまに、悪い子や」

佳也子 「泣き出す。」

「ばあば……」

佳也子 「軽蔑、したらええ。あんなケダモノのみたいいな男にこっちから体許したわたし」と、軽蔑したらええ」

佳也子 「にじりより、強く抱きしめる

陽鞠 「なんでやのんよ、そんなわけないやろ。

軽蔑 「なんかするわけないやん」

激しく泣く佳也子を強く抱きしめる

陽鞠 「陽鞠も泣いてる。」

○前回・佳也子の部屋（夜）

ベッドの中でいっしょに寝ている陽鞠と佳也子。陽鞠、佳也子に抱きつくようにして。

床に置いたスマホからラインの着信音が鳴る。ベッドから出て、スマホを手に取る陽鞠。画面をじっと見ていて、「なにが予定変更や。ついて行つたる」返信する陽鞠。すぐ後の着信音。

陽鞠「そやからついて行く言うてるやんアホ」返信する陽鞠。またすぐの着信音。読みはするが返信をしない陽鞠。

陽鞠「もう知らん」スマホを床に置き、ベッドに戻る陽鞠。またラインの着信音が鳴る。無視をする陽鞠。

佳也子

から

佳也子

から

佳也子

から

佳也子

から

佳也子

から

佳也子

から

陽鞠「明日、サマルカンドの沖村さんにライセンで、きれいに元の髪にできるか訊いてみる陽鞠。」「るかるからーーわたし見たいんや、ばあばのほんまの髪の毛ーーなあ、お願いやからもう自分のこと許してあげて、ばあば」

佳也子

から

佳也子

から

佳也子

から

佳也子

から

佳也子

から

陽鞠

から

陽鞠

から

陽鞠

から

陽鞠

から

陽鞠

から

陽鞠

から

佳也子

から

佳也子

から

佳也子

から

佳也子

から

佳也子

から

佳也子

から

陽鞠

から

陽鞠

から

陽鞠

から

陽鞠

から

陽鞠

から

陽鞠

から

佳也子

から

佳也子

から

佳也子

から

佳也子

から

佳也子

から

佳也子

から

陽鞠

から

陽鞠

から

陽鞠

から

陽鞠

から

陽鞠

から

陽鞠

から

佳也子

から

佳也子

から

佳也子

から

佳也子

から

佳也子

から

佳也子

から

陽鞠

から

陽鞠

から

陽鞠

から

陽鞠

から

陽鞠

から

陽鞠

から

佳也子

から

佳也子

から

佳也子

から

佳也子

から

佳也子

から

佳也子

から

陽鞠

から

陽鞠

から

陽鞠

から

陽鞠

から

陽鞠

から

陽鞠

から

佳也子

から

佳也子

から

佳也子

から

佳也子

から

佳也子

から

佳也子

から

陽鞠

から

陽鞠

から

陽鞠

から

陽鞠

から

陽鞠

から

陽鞠

から

佳也子

から

佳也子

から

佳也子

から

佳也子

から

佳也子

から

佳也子

から

陽鞠

から

陽鞠

から

陽鞠

から

陽鞠

から

陽鞠

から

陽鞠

から

佳也子

から

佳也子

から

佳也子

から

佳也子

から

佳也子

から

佳也子

から

陽鞠

から

陽鞠

から

陽鞠

から

陽鞠

から

陽鞠

から

陽鞠

から

佳也子

から

佳也子

から

佳也子

から

佳也子

から

佳也子

から

佳也子

から

陽鞠

から

陽鞠

から

陽鞠

から

陽鞠

から

陽鞠

から

陽鞠

から

佳也子

から

佳也子

から

佳也子

から

佳也子

から

佳也子

から

佳也子

から

陽鞠

から

陽鞠

から

陽鞠

から

陽鞠

から

陽鞠

から

陽鞠

から

佳也子

から

佳也子

から

佳也子

から

佳也子

から

佳也子

から

佳也子

から

陽鞠

から

陽鞠

から

陽鞠

から

陽鞠

から

陽鞠

から

陽鞠

から

佳也子

から

佳也子

から

佳也子

から

佳也子

から

佳也子

から

佳也子

から

陽鞠

から

陽鞠

から

陽鞠

から

陽鞠

から

陽鞠

から

陽鞠

から

佳也子

から

佳也子

から

佳也子

から

佳也子

から

佳也子

から

佳也子

から

陽鞠

から

陽鞠

から

陽鞠

から

陽鞠

から

陽鞠

から

陽鞠

から

佳也子

から

佳也子

から

佳也子

から

佳也子

から

佳也子

から

佳也子

から

陽鞠

から

陽鞠

から

陽鞠

から

陽鞠

進んでいる地下鉄。

「おばあさんには、訊いたん?」

寿道
寿鞠

「うん、まあ」

「おばあさんには、訊いたん?」

寿道
寿道

「そつか」と頷く陽鞠。

「おばあさんには、訊いたん?」

寿道

「しばらく無言の二人。」

寿道
寿道

「あのやあ」

「おばあさんには、訊いたん?」

寿道
寿道

「わたしらの推測は間違いやつた。ばあ

「わたしらの推測は間違いやつた。ばあ

寿道
寿道

「えーーーそつか」

「わたくしらの推測は間違いやつた。ばあ

寿道
寿道

「そこから先、訊かへんのん? ほんま

「わたくしらの推測は間違いやつた。ばあ

寿道
寿道

「どうやったん、とか」

「わたくしらの推測は間違いやつた。ばあ

寿道
寿道

「いや、それは杉原さんとおばあさんと

「わたくしらの推測は間違いやつた。ばあ

寿道
寿道

「こちから。ぼくが知るべきことやない

「わたくしらの推測は間違いやつた。ばあ

寿道
寿道

「え? ムスツとしている陽鞠。」

「わたくしらの推測は間違いやつた。ばあ

寿道
寿道

「えつと杉原さん、なんで今日いっしょ

「わたくしらの推測は間違いやつた。ばあ

寿道
寿道

「そやから、あかんのん」

「わたくしらの推測は間違いやつた。ばあ

寿道
寿道

「いいや、あかんことないけど。けどやつ

「わたくしらの推測は間違いやつた。ばあ

寿道
寿道

「かりにこういうことは自分一人でやるもん

「わたくしらの推測は間違いやつた。ばあ

寿道
寿道

「勝手に決めんといてえや、そんなん

「わたくしらの推測は間違いやつた。ばあ

寿道
寿道

「ブスツとした顔つきの陽鞠を不思議

「わたくしらの推測は間違いやつた。ばあ

「うに見る寿道。」

○なんばパークス

屋外の商業施設。行き交う人々。地上

にあるホームベース型の記念碑。それを見下ろしている陽鞠と寿道。

陽鞠「ここが野球場やつたなんて、信じられへん」
寿道「うん。南海ホークスのホームスタジアム、大阪球場。ここがほんまのホームベースがあつた場所や」
陽鞠「え、まつてよ。なんで南海ホークスや

「日本シリーズに出たのは近鉄バファローズやろ。近鉄の球場でやらへんかつたらん?」

ムやつた藤井寺球場はナイター設備がなくてな、第二ホームの日生球場は収容人数が規定の三万人に満たへんくて、近鉄が南海のホームやつた大阪球場借りてやつたんが、1979年の日本シリーズなんや」
陽鞠「ふーん、そうやつたんや」
寿道「ピツチヤーズプレートの記念碑もあるんやで」

前を指さす寿道。歩き出す。ついていく陽鞠。

寿道「から『江夏の21球』投げたんやな」
陽鞠「立つてみたら」「えー、それはできんよ」
陽鞠「なんか、やっぱりそれはできひん」
陽鞠「遠慮しい。こんなん気がつかんと、だ

寿道 「——うん」

寿道 「記念碑の上に立つ寿道。まっすぐ前を見る。その方向へ歩いて行く陽鞠。」

寿道 「え、杉原さん？」

陽鞠、ホームベースの記念碑の後ろに立つ。

阳鞠 「春野くん！」

阳鞠 「言うてみてよそこから。今わたしに思つてること！」

阳鞠 「思つてることつて」

阳鞠 「ないん？ あるやろ！」

阳鞠 「言うてつて！」

阳鞠 「あの、なんで」

阳鞠 「なんでもええやん！」

阳鞠 「聞きたいんよ！」

阳鞠 「ほら、言うてつて！」

阳鞠 「まあ、斯特ライクワン。それから！」

阳鞠 「『それから』つて」

阳鞠 「それだけ？」

阳鞠 「まだあるやろ。二球目投げ」

阳鞠 「カツブルが気づき立ち止まる。」

阳鞠 「ツレやとか言ってくれて、ラインの交換道もつとつかしててくれて、いつしょに市立図書館に来れたりして、嬉しきに来れたりして、嬉しくなります！」

阳鞠 「斯特ライクツー！」

阳鞠 「カツブルが立ち止まり、二

寿道 「もう一組のカツブルが立ち止まり、二

寿道 「人の様子を見る。」

阳鞠 「人組のカツブルが立ち止まり、二

陽 鞠 「どないしたん！」

寿 道 「首を横に振る寿道。

寿 道 「そこまでや。それで終わりや」「ほくはこんな体や。走ることもできん。

陽 鞠 「なんやのんそれ。ワンボールや」「なんやのんそれ。体育の授業に出たこともない。見たやろ、

毎日たくさん薬飲んでる。いつまた手術せなあかんか分からん。そんな体なんや」

陽 鞠 「なんやそれ！ ボールツー！」

寿 道 「それがぼくや。これからずっとずつと

続くぼくんなんや。そんなぼくが、これ以上

杉原さんになにを言えるのん」

陽 鞠 「ボールスリー！ キヤツチャ一も捕られへんクソボールでフルカウントや！」

陽 鞠 「うたやろ、今わたしに思つてること言う

てつて！ 今春野君がわたしに思つてること！ いちばん思つてること！ そ

れを聞きたいんやわたしは！」

陽 鞠 「わたしに言わせるのん、それ！」

陽 鞠 「じつと見つめあう陽鞠と寿道。

寿 道 「——好きや」

陽 鞠 「なんて！ 聞こえん！ ファウルや！」

もつと大きい声で言うてえや！ 恥ずかしいん！」

寿 道 「寿道、深呼吸して。

寿 道 「好きや！ ぼくは杉原さんのことが好きや！ 大好きや！」

陽 鞠 「ストライク！ バッターアウト！ 三振や！」

カップル二組が二人に拍手をする。

○地下鉄御堂筋線・車両内

帰りの車両内。隣どうしに座つている
陽鞠と寿道。固く繋がれたその手。

陽寿道鞠 「え、なにが」「ばあばのことや。分かつたことあるん
やけど、それは二人だけの秘密やねん。そ
やからごめんな」

寿道 「ぼくの名前な、今もいっしょに住んで
るおじいちゃんがつけてくれたんや」

陽鞠 「え」「寿道の寿の字には、長生きするつて意
味があるんや。生まれた時から心臓悪かっ
ぱくのためにつけてくれた名前なんや」

寿道 「わわたしの名前もな、じいじがつけてく
れ遊れ」「ぶたなんよ。お陽さまの下で鞠ついて
名前なんよ。お陽さまの下で鞠ついて

陽寿道 「いっしょやん」「いっしょ」
鞠 「めつちや氣に入つてる」「めつちや氣に入つてる」
「笑いあう二人。」「笑いあう二人。」

○ファミリーレストラン・店内
ボックステード向かい合つて座つてい
る陽鞠、凜香と彩美。
彩美「ほんまに、ほんまに春野君とつきあう
ん？」

陽鞠「ていうか、もう三日前からつきあつて

彩美 「前田君のことは？」

彩美「春野君、かあ」

彩美「いや、おかしいとかは、べつに思わへ

凜香「わたしは賛成できひん」
凜香を見る湯鞠。

凛香「手元繫いで終わりやないよ。キスして終わりやないよ。そこから先、春野君大丈

陽 鞠夫
一 な
凛 ん
香 ?

凛香「走るもので、ひん春野君がツクスすることできるん?」

彩美一凛香 それは
凛香「大事なことやから訊いてるんや。そん
なん陽鞠かて分かってるやんな。好きどう
しになるつて、結局そういうことなんやで

凛香「無理や、春野君には。今からでも遅な

彩美「なあ凛香、セックステ男の人、やつぱり、そんなに？」

香「佑志君はすごく優しくしてくれる。わ
たしがそんな気分にならへんときは、手え
握つてるだけのときもある。避妊も絶対し
てくれて、宝物触るみたいにして抱いてく
れる。けど、最後の方はやつぱり激しくな
る。最初はびっくりしたけど、今はその激
しいのが嬉しくなってる。そやからわたし

も負けへんよう。佑志君、力いっぱい抱きしめる。そんで、いつしょに果てる。それがセツクスやで、陽鞠」

彩陽
美鞠
「——わたらしが動いたらええんやろ」

頷く陽鞠。

凛香
「あんたなあ、めつちや痛いんやで最初つて。どこに初めての時自分から男リードする女がいてるんよ」

陽鞠
「ここにいてる。春野君なあ、一歳のときから生きるか死ぬかの大手術六回も受けたきてるねん。六回目は成功率三十パーセントやつてんて。めつちや怖かつたはずやわ、思わへん？」

「そんなに比べたらなんもないわ」

アイスミルクティーのストローに口

陽鞠をじつと見ていた凛香と彩美。やがて凛香、フフッと笑つて。

凛香
「一年の時いつしょのクラスやつたけど、ほんまに優しい子やなつて思つてた」

「——あー、なんなん。これでひとりなんわだけやんかい。わたしも彼氏ほしい！」

彩陽
美香鞠
「——大丈夫やつて、彩美やつたら」

「うんうん、すぐにできるできる」

根拠がない、気持ちがこもつてない
笑う陽鞠と凛香。
始める。彩美も。

凛香、陽鞠の頭に手をやり、髪を撫で

陽 前陽前陽前陽前
つ鞠さ田鞠田鞠田鞠田
い「ん」「い」や
の前から春野君とつきあつて
る

「前陽前陽前陽前
あ鞠田ん鞠田鞠
返事、待たせてごめん」
「かまへんよ」
「うん、で？」
「え——あの、なんで？」
「好きな人ができてん。そんでもうつき
つてる」
「ちよ、誰なん、それ」
「同じくラスの春野寿道君や」
「春野つて、あの春野？」
「授業出られへん、あの春野？」

○ 蒼ヶ原高校・体育館入口
立つている陽鞠。コートでは男子バス
ケットボール部が練習中。出てくる前
田。田。田。田。
「ごめんな、練習中に」
「あんな、わたし前田君とはつきあえへ
ん」
「うん、で？」
「え——あの、なんで？」
「好きな人ができてん。そんでもうつき
つてる」
「ちよ、誰なん、それ」
「同じくラスの春野寿道君や」
「春野つて、あの春野？」
「授業出られへん、あの春野？」

彩凜陽彩凜陽
美香鞠美香鞠
「ちよつと、なにいよ」
「撫でたなるねん、陽鞠のこの髪」
「わたくしもそうや」
「もう、そんなに気安う触らんといて」
「わい」や、気安う触りたい」
「わしたしも」
「嬉しそうに二人にされるがままにな
つていい陽鞠。○

前田「マジで？」

陽鞠「マジや。明後日いつしょに二色の浜行
くねんよ」

前田「俺より春野選ぶわけ？俺、あんなガ
チの陰キャに負けたわけ？」

陽鞠「はい、言うた！」

前田「え」

陽鞠「なんかそういう事言うような気がして
たわ。そしたらこれで」

立ち去ろうとする陽鞠。前田、その背

に向かって。前田、「なんやあ、たいした女やなかつたんや
なあ、おまえ」

陽鞠振り返つて。

陽鞠「ふられたらいきなり『おまえ』かあ。
心技体いう言葉、毎日千回書いてから寝ろ、
おまえは」

体育館の壁を激しく蹴り上げる前田。

○二色の浜海水浴場

海水浴客で賑わっている砂浜を並んで歩く陽鞠と寿道。寿道、肩にかけた大きなタオルを首前で軽く結ぶようにして、胸板を隠すようにしている。

砂浜にビニールシートを敷いて座つ

ている二人。「なあ、いつまで隠してるつもりなん、

寿道胸「——うん」

陽鞠

「——」

タオルを外す寿道。胸にくつきり大き

く残る三十七センチほどの手術痕。

俯く寿道。手術痕を見つめる陽鞠。

「ムカデ這つてみたいやろ。恥ずかし

「怒るで。そういうところは直してほし

寿道いえ」

陽鞠「なにがムカデやのん。どこが恥ずかしいのん。戦つてきた人の体や。戦つて戦つて、それに勝つてきた人間の体や。わたしこう思ふ」

寿道「——ありがとう。もう言わんし、そん

陽鞠「うん——水着似合つてる？」

寿道「うん——水着似合つてる？」

陽鞠「うん——時間かけて選らんでん？」

寿道「よう似合つてる。かわいいで。それに」

陽鞠「それに？」

寿道「水着もやけど、杉原さんがかわいいじつと寿道を見る陽鞠。やがて後ろに

バタツと上半身を倒す。かわいいで。それに」

陽鞠「あー、もう、そういうとこやねんなあ！」

陽鞠「なんなんそれ！」

陽鞠「ていうかな、いつまで『杉原さん』な

寿道「けど杉原さんかてぼくのこと『春野君』

つて言うやん」

陽鞠「そうやけど——そしたら今日から下の名前でいこか」

寿道「呼び捨てで？」

「呼び捨てで」
空を見上げている陽鞠。海を見ている

「なに」「なあ」
寿道。「向こうの方の波打ち際、あんまり人いへん。行ってみいひんか——陽鞠」

「うん、寿道」「うん、寿道」
体を起こす陽鞠。手を繋いだまま人の少ない波打ち際まで歩いていく二人。「こんななんやねんな、海の水つて」

「なあ、座ろうや」「なあ、座ろうや」
頷く寿道。波打ち際に腰を降ろす二人。

「あんなに」「あんなに」
すぎは——陽鞠

「卑下してるわけやないんやけど、ぼくこんな体やろ。そやから——」

「そやから——」「そやから——」
寿道をじっと見つめ、手術痕に手を当てる

「胸ままた陽鞠のを」「胸ままた陽鞠のを」
寿道の耳元に口を寄せて囁く。

「胸へた陽鞠。驚く寿道。ゆっくりとその愛撫を続ける陽鞠。寿道が勃起

「勃つてますけど、春野君」「そら、そんなんされたら、そくな

声を上げて笑う陽鞠。

「阳鞠
寿道
るわ
——」

陽鞠「元気いっぱいやないの。どんとこい、

寿道「『どんとこい』なん?」

微笑んで頷く陽鞠。

陽鞠「まあでも、卒業してからにしよか。わたしもつきあうんなんか初めてやし。ゆつくりいきたい。デー卜、いっぱいしようや」

寿道鞠「ほら、寿道も。気持ちええで」

寿道も仰向けに寝そべる。二人、手を繋ぐ。快晴の空を見上げる

陽鞠「きれいな空やわあ」

寿道鞠「うるさいわ」

「なに泣いてるのん、勃ってるくせに」
陽鞠、微笑んで空を見上げる。寿道、固く続いている。波打ち際に寝転び、手を握り合っている二人。

○ サマルカンド・店内

沖村が椅子に坐った佳也子の髪の毛の色を抜く作業をしている。ソファに座つてその様子を見ている陽鞠。

×

沖村「作業を終える沖村。」

×

沖村「鮮やかな赤い髪に感嘆の声をあげる

陽鞠「これが、ばあばのほんまの髪やつてん

鏡に映るバーガンディの自身を見つめる佳也子。

佳也子「あの人の言うとおりやつたなあ。また見せてあげることできひんかった」

陽鞠「え？」

佳也子、寂し気に笑う鏡に映る自分を見つめて。

(F・O)

○さくらキッチングスクール・事務所

黒電話の受話器を耳に当てている佳也子。

佳也子「うん、分かつた。行くから」

沈痛な表情で受話器を置く佳也子。

○夢山ハイツ203号室(夜)

座卓の上に乗った大盛りの焼きそばを、グラスのビールを飲みながら使うに食べている順平。

佳也子「ごめん、今日時間なかつたから、それしか作られへんかった」

順平「なに言うてんねん。これで十分や。うまいわ、ほんまに」

焼きそばを頬張る順平をしばらく見ている佳也子。

佳也子「ちよつと、出てくるから」

立上がりの佳也子。

佳也子「へ?こんな時間にどこにや?」「香里と美幸に会う約束してんよ」

順平「あかん!いくわ」

佳也子「おまえ」

佳也子「お願ひ、言うこときいて」
順平「いっしょに行くつて」

佳也子「立ち上がりかける順平。」
佳也子「ついてきたら別れる！」
部屋を出でいく佳也子。順平。本気や！」

○公園

(夜)

香里「心配してんやろ、わたしらが警察に
公園の片隅。向かい合っている佳也子
と香里、美幸。

香里「安心し。それ言うたら、わたしらかで
あいつの店に行つたことあるつて言わな
かんの。まあ事件のだいぶん前のことや
から、言うたところでたいしたことない思
うけど、変な噂の元になつてもいややし。
警察にいろいろ訊かれるのこりごりやし。
二人で話して黙つとこつて決めたんよ」

香佳「香里、美幸」
美香「ほんまに。もうあんたとは友だちでも
でもない。それ言いにきたんや」

香里「新聞や雑誌読んで知ってるんやろ。
たしかに全部脱がされてなあ、あいつの言
順番通りブラもパンティも脱いでいい
なあ、あいつの周りに座らされてん。『お
まえらは肉の盾や』いうてなあ」
幸也「なあ、なんであんたがあの日にいてへ
んかつたん。あの男とセックスしたあんた
がんなんであの日にしてへんかつたん？」

香里「わたしら不思議でならんのよ」
女里「あいつな、言うたんやで。『処女貰た
こことにしたんや』『言うてな』

佳也子「そんな：」
香里「ほんまや。わたしらの肩抱きながら、
わわたしらだけに聞こえる声で言うたんや。
今でも夢に出てくるわ」
美幸「よう聞き。あんたがあの男に抱かれて
へんかつたら、あの男は他の銀行襲つてたら
んや。候補は他にもあつたつて言うてたか
らな。そしたらわたしらあんな目に遭わん
ですんだんや」
俯いて無言の佳也子。

○夢山ハイツ203号室（夜）

食べかけの焼きそばを前にじつとし
いていく順平。立ち上がる。部屋を出で

○公園（夜）

香里「佳也子、あんたの初めての男は、殺人
犯の緑山勝次や」

美幸「警官二人と支店長の船曳さんと最初に
防犯ベル鳴らした鈴木君を殺した緑山が、
あんたの最初の男や。あんたが遊びで抱か
れたなあ。そんでその遊びがあの事件のき
つかけや」

佳也子「そんな、そんな：」
手で顔を覆い泣き出す佳也子。その場
にうずくまる。

香里「辛いん？」
「けどなあ——わたしらはも

つと辛あて怖かつたんや！」

佳也子を蹴り上げる香里。地面に転がる佳也子。

○街路（夜）

佳也子を探しながら駆けていく順平。

○公園（夜）

香里「どんな思いした思つてるのん！　あんたのせいや！　ぜんぶあんたのせいなんや！」

佳也子を蹴る香里。美幸、腰を降ろし、佳也子の髪の毛を掴み、顔を上げさせる。

美幸「あんた『きれいやなあ』つてこの髪撫でてもらつて、体中ベタベタ触られて、あの男とセックスしたんやんなあ。四人も殺したあの男となあ。気色悪う」

佳也子の頬を思い切り往復ビンタしてから、顔に唾をべッと吐く美幸。美幸、立ち上がると、佳也子の尻を思い切り蹴り上げる。何度も蹴る。

荒い息を吐いて美幸。

美幸「腹はやめといたる。優しいやろーーんたは運のええ子なんやわ、きっと」

三人に気づく。すり泣く佳也子。

順平、公園の前を駆け抜けようとして、駆け寄る順平。

順平「佳也子っ！」

順平、公園の前を駆け抜けようとして、駆け寄る順平。

美香里「あらら、王子様の登場かあ」

美幸「そうやつて男に縋つて生きていくんよ、

この子は

順平、腰を落とし佳也子の両肩に手を
やり、二人を見る。

順平「なんでや。なんでこんなこと——友だ

美幸ちやろ」「はつ、笑わさんといてえや。こんな汚

い女と友だちなわけないやんか。なあ、杉原さ

ん、ええこと教えたろか。この女はなあ

佳也子「やめてっ！」

美幸縁山勝次やねんで

香順平「えっ……」

佳也子「やめて、やめてえ……」

美幸「あの男のスカイラインの助手席乗つて、

最初はステーキハウス。ええ肉食べてええ

ワイン飲んで、その後六甲山までドライブ。

六甲山で綺麗な夜景見ながらキス。で、最

後は神戸のラブホテル。そやんな佳也子。

でバージン捧げたんやんなあ。四人殺

してわたしら裸にして喜んでた犯罪者にな

なあ。嬉しきに聞かされてるから全部知つ

佳也子の嗚咽、止まらない。

香里「杉原さん、佳也子のことこないにした
の話しあらのこと、恨んでくれてええよ。今
続けられてあんたがこの女のこと好き
去つていく香里と美幸。

佳也子の嗚咽、止まらない。

佳也子の嗚咽、止まらない。

佳 順平「佳也子」
佳也子「そやから、そやから来んといてつて
言うたんや！」

顔を上げ順平を見る佳也子。
佳也子「別れよ、順平」

佳 順平「全部ほんまなんや。あなたのこと騙
ししてたんや。わたしの最初の男は緑山勝次

佳也子「そんなわけ——」

佳 順平「幸運がきつかけになつたんやあの事件」

佳也子「こんななんされて当たり前や。わたし
が抱かれてへんかつたら、あの事件は起きてへん！」

佳 順平「人四人も死んでへん！」香里や美

佳也子「酷い目に遭つたりもしてへん！」ぜ

佳 順平「あんぶが！ いつにわたしのせいや！ フラフラ遊んで、

佳也子「いづいてやれんかった。ごめんな」

順平「あの事件からこっち、おまえ様子がお

なかなかつて、友だちが酷い目に遭わされて、くら

ない。にしがよつぽどシヨツクなんやろな、くら

もしか思つてなかつた。苦しかつたんや

佳也子「順平：：」

順平「やつぱりいつしょについて来てやつて
たらよかつた。そしたら、土下座でもなんて
おまえの代わりに、俺のこと気

順平。

順平「あの事件からこっち、おまえ様子がお
なかなかつて、友だちが酷い目に遭わされて、くら
ない。にしがよつぽどシヨツクなんやろな、くら
もしか思つてなかつた。苦しかつたんや

佳也子「順平：：」

順平「やつぱりいつしょについて来てやつて
たらよかつた。そしたら、土下座でもなんて
おまえの代わりに、俺のこと気

がすむまでどないにでもしてくれって言えたのにな。ごめんやで。許してや。

優しく佳也子の髪を撫でる順平。

佳也子「あんた、どれだけアホやのん。わたし、あんな事件起こした男に抱かれてんで。あんたの

こと、ずつと騙してたんやで」

順平「それがどないしたんや。おまえはそのときの自分の気持ちに正直やつただけや

ないか。もう自分の事、許したれ。な」

佳也子「聞かれたなかつた。順平に知られた

順平「俺は、知れてよかつたって思つてる。そやななかつたら、これからおまえひとり、

苦しがりたい思いさせて生きていかせなあかん

順平也か平也、「順平、順平……」

佳也子「わたし、この赤い髪嫌いや。大嫌いや」

順平也平也、「うん、うん。もうなんも言いな」

佳也子「わたくし、この赤い髪嫌いや。大嫌いや」

順平也平也、「うん、うん。もうこの髪で生きていいきたあんなやつた」

順平也平也、「ほら、いつまでも泣いてんと。どっこも痛いところないか」

順平也平也、「佳也子を立ち上がらせる順平。

順平也平也、「恨まんといて。お願いやから香里と幸のこと恨んだりせんといて」

順平也平也、「うん、うん。分かつてる——よう汚れ

てしもたなあ。帰つて風呂屋行こな」

佳也子の服についた砂を払う順平。佳也子、泣き続いている。
順平「俺も頑張つて、風呂のある一戸建てくらいい買えるようにならんとなあ」
二人、身を寄せ合つて歩き出す。

○路上（夜）

順平並んで歩いている二人。グズグズ泣き続ける佳也子の肩を抱き、引き寄せる順平。

順平「そやけどな、佳也子。髪、黒に染めたかでな、またいつかな、神さんからの授かりものみたいなこのきれいな赤い髪に戻したいって思う日がくるはずやわ」
佳也子「来いひん。そんな日、絶対来いひん」
順平「いやあ、来るような気がするなあ。そきはいちばん最初に見せてや」
順平の子「来いひんねん、そんな日は……」
佳也子「佳也子！」

順平「明日つからほんまに二人で生きていくぞ！」

佳也子「ええな！ 僕をそんな器のこんまいい男や思うなよ！」

順平「あかんか？ うちの社長、仲人、記念組目になるんやつてよ」

佳也子「どんなタイミングでしてくれてんのよ、あんたほんまにアホやわ……」

順平「アホアホ言いな」
佳也子「寄り添つて歩いていく二人の後ろ姿。
それが闇に消えていくつて。」

○
メイ
ン
ヘ
恩
寵
の
バ
ル
ー
ガ
ン
デ
イ
＼

(
了
)